

第三二回村落社会研究会大会 開催予定地のプロフィール

藤井 勝

本年度の村研大会が開催される赤穂市は兵庫県西南部の、いわゆる西播地域に位置している。兵庫県を大きく区分すると、阪神、播磨（播州）、丹波・但馬、姫路の四地域になるが、西播地域というのは播磨地域のうちおおよそ姫路以西を指している。兵庫県もこのあたりまで来ると関西文化もそれ程強くはなく、姫路・龍野の城下町を中心にして固有の文化が発達し、このなから柳田国男、和辻哲郎、三木清、三木露風といった近代日本の優れた知識人、著名人が輩出してきた。

もともと、この西播地域に属しながらも、赤穂市はさらに独自の性格をもってきた。なぜなら、当地は西播地域の西南端にあるが、このあたりまで来ると播州平野も途絶え、東西および北側には山々が列なっているため、南部の市街地を中心に地形的には周辺市町村と非常に隔絶した環境にあったからである。今日でこそ鉄道・道路網の発達により周辺との交通も容易になったが、第二次大戦後に国鉄赤穂線が開通するまでは、南部の市街地（旧城下）と周辺との連絡は極めて不便であった。山間を南北に貫流する千種川の河川交通（大正末期からはこの間を軽便鉄道が走る）經由で北部を東西に横断する山陽道（明治初期から現在の山陽線も走る）につながるか、瀬戸内海の海上交通を利用するかの主につながるか、あとは東西の峠越しかなかった。

このような赤穂市の地域社会としての性格を知るため、ここでは

まず塩業に触れよう。当地の塩業は平安期の資料にすでに名を現わしているが、近世初期から中期に赤穂と不可分の関係に発展して行く。この頃には、本格的な入浜式への製塩技術の革新がみられ、しかも、この赤穂に定着した入浜式の技術が瀬戸内海の他の塩田地帯に伝播される程の技術的優位が形成されるとともに、藩の殖産興業政策による大規模な塩田開発が千種川河口デルタに展開され、塩田面積は近代初期の一〇〇町程度から一八世紀初頭には二三〇町近くまで増加するのである。「忠臣蔵」で全国に知られる赤穂浅野家は当時の藩主であり、主君長矩の仇討を果した「赤穂四十七士」は塩業確立期の浅野家家臣団にほかならなかった。そして、その後も当地の塩業はますます発展し、最盛期の近代初めには塩田も四〇〇町歩を超えるに至り、直接産業に従事する塩民はもとより、商人、地主といった社会諸階層が徐々に塩業と結びつき、地域社会は長らく塩業を中心として営まれてきたのである。

しかし、第二次大戦後にはこのような地域社会のあり方も急速に変化してきた。つまり、戦後の政策側からの塩業近代化・合理化の要請に対応した製塩技術の革新により、昭和四〇年代にはイオン交換法による一貫した工場製塩へと急テンゴに転換が進んで、旧来の塩田経営による製塩は完全に廃止されてしまったのである。塩業従事者のほとんどは転職、転業の道を歩み、不用となった広大な塩田跡地には電機、セメント、化学、火力発電などの近代工場が誘致されたり、新興住宅地の開発がなされ、地域社会の再生・再編が進みつつある。

もともと、以上は旧城下と塩田地帯を抱えた南部の旧赤穂町を主な舞台とした展開であり、現在の赤穂市をそれだけで説明すること

はできなす。

区域の中部から北部にかけては（旧坂越町の一部・旧高雄村・旧有年村）、千種川の両岸に農村の点在する地域が南北に長く広がっている。これらの村落の形成は中世以前にさかのぼるから、近世期になつての本格的塩田開発や城下町形成によつて体裁を整えた南部の中心地より歴史的には古い。その農業は古くから水稻に傾斜していたとされるが、これを可能にしたのは、兵庫県でも有数の水量をもつ千種川水系の存在であり、北部にはため池依存もみられるものの、今日にいたるまで多くはこの水系を灌漑用水としてきた。もつとも、この川は古くより洪水を度々繰り返しており、明治二五年の大洪水を契機とした河岸整備以前には、二、三年に一度の割合で洪水があつたといわれるから、決して農民たちに恩恵だけをもたらしてきたのではなかつた。

戦後には、そ菜、養鶏、畜産（牛）、果樹（いちご）なども部分的に試みられてきたが、米作にとつかわる程の産地形成はなされていない。むしろ、ほとんどの農家は通勤兼業の道を歩んでいる。しかも、赤穂市南部の工業化より姫路、相生などの近隣工業地域の発達の方が大規模で定期的にも早かつたこと、また市域中・北部からこれら都市への交通は比較的容易であることなどのため、市外への通勤兼業の占める割合が今日にいたるまで高く、それだけ市中心部との経済的つながりは弱いといえる。

これに対して、瀬戸内海に接した南部の海岸線沿いには沿岸漁業を営む集落が点在してきた。現在も旧町村単位に組織された、坂越・赤穂・福浦の各漁業協同組合が旧来からの漁業権を管理している。僅か二〇キロメートル程の海岸線（うち三分の一はかつての塩田が

海岸線をなす）に並んだ漁業地区だが、置かれた自然環境の差異にもとづいて、それぞれ個性をもつた漁業を形成してきた。坂越ではイワシ船曳、赤穂ではのり養殖、福浦では小型定置である。漁村として最も歴史のあるのは坂越で、宮川満氏によつて近世期のイナ座が紹介されたこともあるが（魚澄惣五郎編『瀬戸内海地域の社会史的研究』一九五二年所収）、戦後は千種川河口へのり養殖業を導入して飛躍的成長を遂げた赤穂がむしろ市の漁業をリードしている。

もつとも、当地の漁業は坂越のイワシ船曳を除いてほとんど全てが家族経営のため零細であり、瀬戸内海の汚染の影響も手伝つて前途は決して明るくない。また、福浦は昭和三八年に越県合併によつて岡山県日生町から赤穂市へ編入された時、地先海面のほとんどは岡山県側に残してきたという特殊事情のため、漁業権をめぐって今日まで問題をかかえている。

このようにして、現在の赤穂市は旧城下と塩業の解体によつて生じた商工業地区を中心として、北に農業地区、南に漁業地区を配する多様な構成をとっており、日本型地域社会の縮図といえるかもしれない。

なお、大会会場の置かれる御崎観光地区は瀬戸内海国立公園の一角をなし、眺望の優れた景勝地であるとともに、一七世紀の赤穂塩業確立期に他領からの塩民が集団的に定着して形成した集落を間近にひかえている。

詳しく当地についてお知りになりたい方は、現在刊行中の『赤穂市史』、広島県道『赤穂塩業史』、神戸大学社会学研究室編『産業化と地域社会の変化―赤穂市の30年―』（いずれも赤穂市発行）などをご覧いただきたい。